
Crystal of moonlight

塩結G音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r y s t a l o f m o o n l i g h t

【Nコード】

N 1 0 8 1 P

【作者名】

塩結G音

【あらすじ】

四人の英雄の物語。

今回はヒエン・ソリダスター。

「だから、うちは冒険業幹旋屋だ!!」

昼、冒険宿屋の1階に降りると、二人の男が言い争っている。

一人はこの店の店主、ごつい体躯に黒鬚のドワーフ。

もう一人は初めて見る男、何処かの執事か、落ち着いた白鬚の人間。

正確には見下ろされているドワーフの親父が背伸びしてガナっているだけであった。

「そんな仕事、教会にでも頼めばいいだろ!!」

「教会にここを紹介されたのですが……」

「……」

「どうか、したのですか?」

黒髪の僧侶、ソリダスターが礼をしながら二人に近づく。

「あ、騒がしてるかい?」

注文か?」

店主は軽い笑みを浮かべながらこちらを向く。

「いえ、教会と声が繋がったものですか」

「ああ。いや、この御仁が変な依頼を持ってきやがって」

「しかし、こちらは大変困っているのです」

それを訴えるかのように軽く手を広げる執事。

「変な依頼?」

「幽霊退治だよ」

「ほお」

ソリダスターが笑顔になった。

「いいか、このご時世にモンスター退治でなく、幽霊だぞ?」

「そんなもん、僧侶どもにお払いでも受けてりゃいいだろ!?!」

「引き受けましょう」

「あん?」

ソリダスターが執事に向き直る。

「私、僧侶・ソリダスターがその幽霊騒動に参加させていただきま
す。」

「よろしいですか？」

「はい。よろしく願います。」

奥様も大変喜びます」

執事が礼する。ソリダスターも礼を返す。

「それで、申し訳ありませんが、これからすぐ、来ていただけます
か？」

「はい、かまいません」

「馬車を表に回させます」

そう言う執事はもう一度お辞儀をして、宿屋を後にした。

「いいのかい？こんな変な事件を安請合いして」

店主はつまらなそうに肩肘を突いて言う。

「変な事件だからこそ、私はこの目で見たいのですよ」

そう笑顔を作ると、ソリダスターと一緒に降りてきた仲間、ヒエ
ンに声をかけた。

「一緒に行きませんか？」

「何で？」

あからさまに嫌な顔をするヒエン。

「先ほど彼は”奥様”と言っていました。」

つまり、彼の主は女性であると考えられます」

「ふむ…」

扉が再び開き、先ほどの執事が現れた。

「ソリダスター様、よろしいでしょうか？」

するとヒエンが彼に近づく。

「なあ、おっさん。その奥様って、美人？」

「は？はい、奥様はお美しくございますが？」

突然、ソリダスターとの間に割って入った男に怪訝な目をしながら、
「ちゃんと応対する執事。」

「はじめまして、僕はソリダスターの友人・ヒエンと言います」
執事の手を取って無理やり握手をする。

「彼と一緒に、事件解決に全力を捧げます」

「あ、ありがとうございます」

執事は困ったように頭を下げる。

「さて、行きますか？」

ソリダスターの声に執事はうなずき、前に止められている馬車に二人を導いた。

町から20分ほど離れた森の中に屋敷はあった。

広い敷地を金属製の高い柵で囲われている。

正門は執事の声で通りぬけ、屋敷の南側の駐車スペースに馬車を止めた。

屋敷は2階建て。それほど古いとは思えない作り。

「……幽霊屋敷じゃ、ないね」

「そうですね」

ヒエンの問いにソリダスターは笑顔で答える。

「こちらでございます」。

ソリダスター様、ヒエン様」

執事に導かれるまま、2階の日当たりのよい応接間に案内された。廊下や応接間に雰囲気の良い風景画が飾られている。

少し待つと、人間の貴婦人が入ってきた。

30代の美しく上品な黒髪の婦人。ヒエンは軽く口笛を吹いたので、執事に睨まれた。

彼らの向かいに座ると軽くお辞儀をした。

「お忙しいところをわざわざおこしくださって、申し訳ありません。私、シャーロット・デルガドと言います」

「いえ、こちらこそ、招待いただきありがとうございます」。

僧侶・ソリダスターです」

ソリダスターがうやうやしくお辞儀し、ヒエンは嬉しそうに笑ん

でるだけ。

「それで、幽霊というのは？」

「じつは2日前の晩、寝室で眠っておりましたから、真夜中にふと目が覚めたのです。」

すると、窓から差し込む月の光の中に、若い女性が立っているのが見えたのです。

その女性は青くて透き通っており、その…何一つ身に着けていませんでした」

「え、幽霊って、女性なのですか？」

ヒエンは驚いたように尋ねる。

「はい。私が見かけたのは若い女性でした」

「へえ」

さらにヒエンは嬉しそうな顔になる。

「その女性に見覚えは？」

「いいえ」

ソリダスターの問いに首を振る。

「彼女は壁にかかった絵の前に立ち、それに興味があるのかのように、手を差し伸べていました。」

その姿が見えたのはほんの数秒間でした。

びっくりして身を起こすと、すうっと消えてしまったのです。

でも、信じてください。夢や幻覚ではなく、確かにこの目で見たんです」

「ええ、信じますとも」

ヒエンが応じる。

「ありがとうございます。」

それで、慌てて隣に寝ていた夫を揺り起こし、

「旦那さんがおられるのですか？」

ヒエンが嫌な顔をする。

「はい、今は仕事に出ておりますが」

「どのようなお仕事を？」

沈むヒエンを無視して、ソリダスターが尋ねる。

「魔法ギルドに卸す、商品開発をしております」

「それで、これだけのお屋敷を。
続きをどうぞ」

ソリダスターはうなずきながら先を促す。

「主人に幽霊を見たと言ったんですが、相手にしてもらえませんでした。」

私だけが見たのでしたら、気のせいじゃ済んだでしょう。

でも、使用人のジェラルドも、地下で奇妙なものを見たと言っているんです。

ほかの使用人たちも、この5日ほどの間に、みなそれぞれおかしい体験をしております。

何かがこの屋敷の中で起きているのは間違いないのです」

シャーロットは言葉を切った。

「今のところ被害らしい被害はありませんけど、このままでは安心して眠れません。」

お願いです。どうかこの謎を解いて、これ以上おかしいことが起こらないようにしてください」

「努力させていただきます」

ソリダスターは自分の胸に手を置いた。

「それで、事件はここ最近だけですか？」

「はい。使用人たちの話を総合してみしても、おかしい事が起こり始めたのはここ5日ほどのことです」

「ここで、何か事件などが起きたことは？」

「事件、ですか？」

そうですね、15年前に、何かあったとは聞いていますが、正確なことは。

何しろ、嫁入り前のことでしたから」

「まるで、推理物語だ」

ヒエンが尋ね役のソリダスターを皮肉った。それを無視して、

「では、ご主人が恨まれるようなことは？」

「私は主人の仕事を詳しくは知りません。」

でも、業界で大成功をしておりますから、恨まれもしているのでは」

「ふむ」

ソリダスターはアゴに手を置き、笑顔になる。

ヒエンはここまでの流れで1つ気になった事がある。

「すみませんが、この依頼はご主人の？」

「いえ、私の独断です。」

主人は『幽霊など、モンスターではあるまいし』と取り合ってくれません。

もちろん、報酬はちゃんとお払いいたします」

「えっと、それでは、他の使用人たちの目撃談を聞きたいのですが」

「ええ、構いません。」

誰からお呼びしましょうか？」

「いえ、結構です」

ソリダスターが手を上げて静止する。

「自分の足で会いに行きます。」

この館も調べたいですし。よろしいですか？」

「そうですね、もちろん構いません。」

では、レイモンド。こちらの方々の案内をよろしくお願いしますね」

「かしこまりました」

今迄無言で婦人の横に立っていた執事がうなずく。

彼の名前がレイモンドのようだ。

「では、こちらへ」

「それでは、失礼します」

レイモンドに導かれ、部屋を後にするソリダスター。

「必ず、解決してみせます」

別れの握手をちゃっかりとヒエンはしていた。

「どなたに、お会いになりますか？」

部屋の外に出るとレイモンドが尋ねてくる。

「どなた、と言われても…。」

この屋敷には使用人は何人いるの？」

ヒエンが聞く。

「私にメイド3名、調理師2人と他に4人で、合計10名になります」

「それでは、先の話に出てきました、ジェラルドさんは？」

ソリダスターの頭の中には確実に先の話が入っている。

「ジェラルドは、地下で調理見習いをやっております」

「結構。まずは彼に会いに行きましょう」

「こちらです」

レイモンドが歩き出し、ソリダスターが続く。

ヒエンも慌ててそれを追う。

応接間から出てすぐの階段を降り、玄関とは逆の、奥の地下への階段を降りる。

「ここにはご夫妻と使用人、だけでお住まいなのですか？」

ソリダスターが尋ねる。

「いえ。カレンお嬢様がおられます」

「幾つ？」

ヒエンが期待を持って尋ねる。

「今年で7つになりました。」

今は初級魔術学校に通っておられます」

「手を出したら犯罪ですね」

そう言うソリダスターより、それを聞いたレイモンドがヒエンを見る目が怖かった。

「それで、あなた自身は、幽霊を見たことは？」

「残念ながらございません。」

ただ、昨日の昼、2階にありますカレン様の部屋の前を通りますと突然、扉が開いたのです。

カレン様は学校の時間でし、窓は閉められておりました。まあ、何処からかの風のいたずらかもしれません」

レイモンドは自信なさげに笑い、階段を降りる。

「あなたはここに勤めて長いの？」

ヒエンが聞く。

「そうですね。」

この屋敷ができました、16年前からですから、一番長くお世話をさせていただいております」

「16年。それでしたら、15年前の事件とやらをご存知で？」

ソリダスターが口を出す。

レイモンドの顔が渋くなる。

「ええ、はつきり憶えております。」

悲しい、事故がありました。

ある夜、私が休んでおりますと、悲鳴が聞こえましたので驚いて飛び起きました。

玄関ホールに出てみますと、2階からボウガンを構えたご主人様が血相を変えて降りてまいりました。

後を追って庭に出ますと、書斎の窓の下に、黒いシャツに黒いズボンの女性が地を流して倒れておりました。

ご主人様の話では、2階の寝室の窓から忍び込もうとしたので、発射したそうです。

まだ意識がありましたので、僧侶達を呼び集めたのですが、間に合いませんでした……」

最後は力なく言葉を切った。

「その女性を見たことは？」

「ええ、一応。」

ですが、今回の一見とは関わりないと思われますので、これ以上申し上げることはできません。

「さあ、こちらが地下調理室でございます」

階段を降りるとすぐに調理室だった。

そこには20代の青年と、50代のコックがいた。

何かの下ごしらえ中か、火を使わずに準備をしている。

「こちらが、幽霊騒動を解決してくださる、冒険者、ソリダスター様と、ヒエン様です」

二人にレイモンドが紹介すると青年の方が慌てて帽子を取り、駆け寄ってくる。

「お願いします。」

僕は怖くて仕方がないんです」

そうソリダスターの手を取り上げた。

「えっと、あなたが、ジェラルドさん？」

「はい。ジェラルド・モートンです」

ソリダスターは手を解き、距離を離して話し始める。

「それで、一体、なにを目撃したのですか？」

「はい。えっと、あれは3日前の夜でした。」

ここで後片付けをしようと来たんですけど、そのとき、物音がしたんです。

ネズミかな、と思いながら灯りをつけたんです。

えっと、大きさは握り拳二つくらいかな？」

自分の拳を目の前でくっつけて見せる。

普通の成人男性のサイズだ。

「こんな大きさのナメクジのような形をして、クラゲみたいに透き通っていて、ぐねぐねとうごめいてるんですよ。」

緑とか赤とかが混じっている、まるでゲロみたいで、ひどく気味が悪かったです」

「バカヤロウ。料理を扱う俺たちがそんな説明をするな!!」

後ろに控えるコックに怒鳴られ、ジェラルドは肩をビクつかす。

「でも、本当なんですよ。」

それが地面から1mに浮かんでて：僕が灯りをつけたら慌てて調理台の裏に隠れていきました。

僕は怖くて入れなくて。それで30分位してマクラウドさんが通りかかって、後片付けしてないこと、怒られて。

それから説明して、一緒に調理台の裏を見てもらったんですけど、何もありませんでした。

本当に怖かったんです。お願いします。解決してください」

ジェラルドは深々と御辞儀をする。

「えっと、マクラウドさん？」

ソリダスターは目線を奥のコックに移して尋ねる。

「おう」

「彼の証言はあってますか？」

「さあな。俺は目撃したことはねえが。」

だが、ジェラルドは嘘をつく男じゃない。何かを目撃したんだろ」

「あんたが目撃したことは？」

ヒエンが聞く。

「あん？いや、俺はないな。」

ただ、この間、地下を歩いていたら、誰かとすれ違った気配だけはしたな。

他に誰もいなかったからゾツとしたことはある」

「それで、この調理場で最近、何か変わったことは？」

ソリダスターも聞く。

「そうだな、チーズや牛乳とかがちよくちよくなってるな。」

誰かがつまみ食いでもしてんのか？ジェラルド、お前じゃないよな？」

「ち、違いますよ！」

ジェラルドは慌てて顔を起こして否定する。

「ありがとうございます。」

また尋ねる事ができましたら、うかがいます」

ソリダスターが礼をして、離れるのでレイモンドとヒエンが続く。

「おう、今晩はご馳走を出してやるよ」

「よろしく、お願いします!!」

後ろから二人の声が響く。

「うゝん、どうも体調が優れない」

1階中央の、大ホールまで戻るとヒエンが手を上げた。

「それはいけませんな。大丈夫ですか？」

レイモンドが寄って来る。

「休めば治ると思うんで、すまないけど、部屋を借りれない？」

「2階の北側に、客室がございます。」

今晩からそちらで休んでいただくつもりでしたが」

「ありがとうございます。悪いけど、先に休まさせてもらうよ」

ヒエンはそう言い腹を押さえているが、顔色は良さそうだ。

ソリダスターが笑顔でヒエンに耳打ちをする。

「飽きたんですね？」

ヒエンはうなずく。

ソリダスターは一步下がり、声を上げる。

「分かりました。体調を押してまですることではないでしょう。

情報収集は私がやっておきますよ」

「すまないね、ソリダスター」

「いえいえ、ではお大事に。ホームズさん。

いきましよう、レイモンドさん」

「は、はい。」

ヒエン様、何かありましたら、すぐにお呼びください」

二人を手を振って送るヒエン。

「ホームズ?じゃあ、僕が謎解きをするの?」

どこかで読んだ、小説の登場人物の名前だ。

「そうですね?あなたが謎を解くのです」

2時間後、夕食前に部屋に戻ってきたソリダスターは笑顔で答え

た。

「情報はお前が得意だろ？」

ベッドに寝つ転がりながら、ヒエンが見上げる。

「ははっ、ヒエンさん。」

私は情報収集が好きなんですよ。分析は趣味じゃない。

それでも、私に任せますか？」

「……いいよ。僕が解いてみせる。」

ソリダスターの名にかけて！！」

勝手に人の名を賭けないで下さい。迷惑です」

笑顔で椅子に座るソリダスター。

「それでは、先ほどの情報収集を披露したまえ、ワトソンくん」

ヒエンもベッドに座る。

「そうですね」

そっぴいながら、彼は袖から本を取り出し、読み始める。

「あれから、他の7人の使用人と言葉を交わしてきました。」

メイド2人から足音が聞こえた、目線を感じたという話。

ボイラー係から誰もいない湯船で水音がしたと聞きました。

幽霊の話ではありませんが、庭師が最近、変な老婆をよく見かけると教えてくれました。

そして彼らは、勤めだして10年以内で、15年前の事件について知っているものはおりません」

ソリダスターは本を読みながら、説明した。ちなみにまったく関係のない本である。

頭の中でまとめあげた情報を口から話すだけ。彼にはメモも要らない。

「……やっぱ、ソリダスターは15年前の事件が何か関係あると思ってるの？」

ヒエンはめんどくさくなり、ベッドに頬杖をついて尋ねる。

「さあ？偽誘導かも知れませんが。」

私は情報の収集を行っただけですから」

笑顔でお手上げとばかりに手を上げるソリダスター。

「他には？結構時間かかってたけど？」

「カレンお嬢さんと接触してきました」

「あ、お子ちゃまがいたんだっけ？」

思い出したような表情のヒエン。

「母親の面影が何処となくある、綺麗なお嬢さんでしたよ」

「手を出したら犯罪だぞ」

「お会いしたのは彼女の部屋の前。

いろいろ、尋ねてはみたのですが、『あたし、知らない』と答え
えていただきました」

ヒエンの茶々を相手にせず、笑顔になるソリダスター。

「その後、レイモンドさんに聞いたのですが。

彼女は内向的で、お人形遊びが好きだそうです。

屋敷の庭や部屋で遊んでいるそうですが、最近はず部屋だけだそう
で」

と扉を叩かれた。

「ソリダスター様、ヒエン様。

お食事の準備ができました。食堂におねがいします」

ノックと共にレイモンドの声が聞こえる。

「では、コックのマクラウドさんの腕前を見ましょうか？」

「そうだな」

二人は部屋を出た。

「こないかがわしい連中を家の中に入れるとは何事だ！

すぐに追い払え！」

野太い怒鳴り声が屋敷に響く。

この館の主人、ラルフ・デルガド氏が食堂におり事情を聞いて、
叫んだのだ。

黒髪でこつく、商人というより肉体派の人間だ。

ソリダスターは笑顔になり、ヒエンは胡散臭そうにその顔を見る。

主人がもう一度、怒鳴ろうと口に息を溜めている間に、夫人・シヤロットが駆け寄った。

「お願いです。」

もし、本当に幽霊がいて、私やカレンに何か危害を加えたらと思うと、心配でならないのです」

夫人が涙目ですがりつく。

「だが……！！」

「お願いです！」

「……」

「お願いします！！」

「分かった！！ただし、」

夫人を払い、ラルフは二人を指差す。

「滞在は今から3日。それまでに事件を解決しろ！しなければ、報酬はないぞ。」

食事の面倒は見るが、それ以外は援助しない！

ここで犯罪を行ってみろ！ただちにたたき出すからな！！」

ヒエンは胡散臭そうな顔のまま。ソリダスターが笑顔のまま、お辞儀をする。

「構いません。全力で、解決へ向かいます」

「ふん。おい、レイモンド。飯だ！！」

「はい、ご主人様」

ヒエンたちも席へ促され、食事が運ばれてくる。

主人が上座に座り、左右に夫人と娘。

ヒエンとソリダスターは家人から離れた位置に座らされた。

料理は十分な味と量のものであったが、終始、夫妻は無言だ。

ラルフは気品もなく、ガツガツと一番に食べ終わると、声を上げる。

「レイモンド、書斎に行くぞ」

「はい、ご主人様」

夫人と顔も合わさずに、彼は食堂を出て行く。

レイモンドも一同に礼をして、慌てて後を追う。

すると、夫人がため息をついた。

「冷めて、ますね？」

食事の手を止め、ソリダスターが夫人に声をかける。

「恥ずかしながら。」

今見ておわかりのように、私たちは愛し合っておりませんの。

父が決めた政略結婚で、どんな人かもろくに知らずに結婚したんですもの。

10年も一緒に暮らしてきましたが、一度だって心が通じ合ったことはありません。

本当を言えば、離婚したいのですが、夫も父も許してくれないのです。」

夫人は軽く笑い、言葉を続ける。

「主人は冷たい人間ですわ。残酷で、お金のためならどんなことでもする……」

ちょっとしたことで、娘に暴力をふるうこともあるんです」

その娘は人形と一緒にスプーンだけで、食事をしている。

話の内容は分かっているのか、気にしていないのか。

「どうです、ご婦人。今宵、私があなたを愛してみせましょうか？」

いつの間にか食べ終えたヒエンが、夫人の手を取り上げていた。

最上級の微笑みの顔で。

「えっ……」

夫人は少し赤くなる。

「ゴッホン!!」

大きな咳払いが聞こえる。

見ると部屋の入り口にコック・マクラウドが立っている。

「デザートを、お持ちしました!!」

怒った笑顔で、二人の間に割って入り、夫人にデザートを置く。

ラルフだけ全ての品を一度にテーブルに置かれ給仕を必要としなかった。

手を解かれ、夫人は安堵の表情を浮かべ、笑顔をヒエンに向ける。
「ありがとうございます。」

でも、私には娘がおりますから」

「おらおら、アンタも席に戻りな!!」

マクラウドに着席を促されるヒエン。

「くそ、あのコック」

食堂を二人で離れ、ヒエンは毒づいていた。

「いや、残念でしたね」

「ふん」

たれてきた紫色の髪をかき上げるヒエン。

「それで、君の見解は？」

「見解？」

「この幽霊騒動だよ。」

食事の前に話が切れちまったじゃん」

「私に見解など、」

「これはアンデッド、モンスターの可能性を聞いているの。」

ソリダスターは、僧侶だろ？」

「ああ、そういう意味ですか。」

そうですね、この場合、ゴーストの可能性が考えられましたが、
それにしても理性的な行動をしています。

風呂にも入っていたようですし。それに生前の肉体を残している
とも考えにくい。

この場合、」

ソリダスターは言葉を切った。

「そういえば、ヒエン」

「あ？」

「後で、開けてほしい扉があるんですよ」

「？」

「執事の方でも鍵を持たされていない、実験室があるんです」

「へえ、今からいくか？」

「いえ、私は図書室を見つけたので、そちらへ行きます」

「……お前らしいや。時間は大丈夫か？」

「3日間あるのでしょ？ワトソンの1日くらい潰れても大丈夫でしょう。」

ねえ、ホームズさん」

ソリダスターは笑顔でそのまま、客間の隣にある、図書室へと向かった。

「うゝ、夜は冷えるな。これならコックに寝酒でも分けてもらってくれば良かったかな？」

ヒエンは呟きながら、夜の廊下を歩いている。

一度は寝たが、なんとなく目が覚め、小水に向かう。

ソリダスターはまだ、図書館から帰って来ない。

「あゝ、でもあつたまるのは、やっぱり美女の身体だよな。」

シャーロット婦人、だっけ？」

一人ニヤつきながら歩くのは異様かもしれない。

と、目線を西の窓に向けると、月の光の下、1階の書斎の外に立ち、中を見上げる全裸の女性の姿が見えた。

「なっ！」

小さく叫ぶと同時に、右手を掲げ、そこに火の玉を作るヒエン。女性は一瞬だけですぐに姿を消した。

辺りを見るが、何も感じない。

ヒエンは左手に杖を掲げた。

「……、ふむ」

呟くと、杖をしまい、トイレに向かう。

「それで、何か分かりましたか？」

ソリダスターが部屋に戻ったのは朝、さらには朝食を済ませてから戻ってきた。

家の主人はすでに仕事に出かけている。

「あつと、確かに女だったね。」

身体づくりからいって、20歳は、いってないかな？

毛は薄め」

「毛？」

「そう、下の毛。胸も小ぶり」

「そうですか」

透明な相手にそんな事に目が行くヒエンにそれを流すソリダスタ
！。

「移動が速いのかもしれないけど、魔法の存在は確認できなかった
よ」

眠いとにかくにヒエンがベットから答える。

「そっちは？」

「イロイロな、有名図書を見かける事ができました。」

保存状態もよく、ほとんど読まれていませんでした」

ソリダスターは嬉しそうにいつもの笑顔だ。

「でも、魔道工学だけは、読み込まれていました。数も多かったで
すね」

「魔道工学？」

「ええ。魔力を装置などにより効果の変更や倍増を狙う学問です。

ちなみに、私の専門分野です」

「ああ、そう」

神学が専門ではない僧侶。

「今日はどうします？」

新しい僧衣にまといなおし、ソリダスターが尋ねる。

「えーと、気になる、15年前の事件を調べるには、どうすればいい
んだ？」

「そうですね、ここの寺院か魔術ギルドに向かい、記録係か語り部
に会えばいいですね」

「んじゃ、寺院へ行きますか。」

「アポお願い」

ヒエンもベッドから立ち上がる。

「すみませんが、当院には記録係も語り部もおりませんが」

この町唯一の寺院、海王教にいた中年の司祭は頭を下げた。

一人で全てをまかなう、小さな寺院だった。

ソリダスターと同門であるため、簡単に会うことはできたのだが、ちなみに、魔術ギルドはこの町にはない。

「おい、ソリダスター」

「困りましたね。」

あなたは、15年前の事件について、ご存知ではないのですか？」

「15年前？」

「ええ、この先の、デルガド邸で人が射殺された事件」

「あ、それなら憶えております。」

どうぞ、奥へ」

ソリダスターたちは礼拝室から、司祭の私室へ移された。

「憶えて、おられたのですか？」

ソリダスターが逆に尋ねる。

司祭は二人に背を向け、何かを探している。

「ええ、えっと、確かに。」

ああ、ありました。この日記に、つけてます」

そっぴいながら取り出した本は古く、ボロボロのものだ。

二人に見せるつもりはないらしく、そのまま彼らの向かいに座った。

「えっと、そうですそうです。」

亡くなられたのは、ジェニファー・ランドという女エルフでしたね」

「エルフ……」

「デルガド邸でなにやら研究をしていたそうですよ」

「やはり、あの館の関係者でしたか」

「でもさ、15年前の事件、よく覚えてたね。」

いくら小さな町とはいえ、他にも事件あるだろうし、その日記を見るまでも覚えてたみたいだけど？」

ヒエンの問いに司祭は薄く笑う。

「それは、憶えてますよ。」

私が相談役だったのですから」

日記を閉じ、二人を見返す。

「あの事件よりさらに以前に彼女の相談を受けた事があるんです」
「相談？」

「ええ、ここは寺院ですから。」

イロイロな相談を受ける事に行っているのです。

そのことで、心の平穏を取り戻すのは、医術や呪文にはできない
ことですから」

「それで、その女性の相談とは？」

「正確には彼女ではありません。ラルフ氏につれてこられたのです。
彼女は一日にして錯乱状態に陥ったそうです。記憶も失っていました。」

凶暴性はありませんでしたが、『宝石がいつぱいの世界』とか『
恐ろしいモンスター』とか呟くばかりでした。

奇妙な体験でしたから、憶えていたんです。

彼女にはここでの入院、安静を勧めたのですが、ラルフ氏がなぜ
か拒否されましたね。」

代わりに、メイドをつけて山荘で療養させたそうです」

「それで、発狂の原因は分かったのですか？」

「いえ、まったく。」

外傷ありませんし、よほどの精神的ショックを受けたとしか…」

「でも、彼女は山を下りてきた」

ヒエンにうなずく司祭。

「1年もしないうちに正気に戻られましたよ。」

それから、ここでもう一度、お会いしたのですが、全く異常がなかったなので、私は裏書きをしたぐらいです。

でも、それから、事件がおきたんですよ」

「事件のあらましをもう少し、お願いします」

ソリダスターの言葉に日記に目を落とす司祭。

「えっと、事件がおきましたのは、夏です。15年前の。」

深夜に彼女が屋敷に忍び込んだところを、ラルフ氏がボウガンにより、撃ち殺す。

ラルフ氏に証言により、危害を加えようと侵入したと判断され、彼は正当防衛となりました。

忍び込んだのは事実ですから、どうすることもできません。

そのとき、私に相談したという履歴だけが取り上げられたのですが、でも、彼女は確実に治っていたのに……」

司祭は悔しそうに拳を握った。

「それで、これからどうします？」

ソリダスターが礼拝を終えたのは昼を過ぎていた。

「屋敷に戻る、で、寝る」

自信満々に答えるヒエン。

「寝るって」

「どうせ、幽霊さんは夜しか現れないんだろ？
だったら、夜起きとくよ。」

それより、ワトソンくんは町での情報収集をよろしく頼むよ」

「……私に面倒ごとを押し付けようとしてませんか？
「分かる？」

「ま、かまいませんよ」

「それより、ソリダスターは寝なくて大丈夫なのか？」

「寝る？」

「徹夜で図書調べてたんだろ？」

「ああ、私は一週間で42時間も眠れば十分ですから心配なく」

「あ、5日は完徹できると。
んじゃ、後でね」

ヒエンは屋敷へ足を向け、ソリダスターは町へ足を向ける。

屋敷に戻ったヒエンはそのまま、横に回り、昨夜、女が立っていた場所に向かった。

そして同じ場所から同じ方向を見してみる。

やはり見えるのは南西の端、書斎の窓である。

「ふむっ」

一人うなずくと、ヒエンは表から中に入っていく。

書斎には鍵がかかっており、呪文で開けたが、一応レイモンドの合鍵を頼んだ。

ラルフが仕事をする部屋らしく、大きなデスクと壁には百科事典などが並ぶ。

大きな窓があり、先ほど立っていた場所が見える。
デスクに座ると背になる、壁には大きな果物の静物画も飾っている。

レイモンドが脇に立っている、また後片付けがめんどつなのであまり物を動かさずにイロイロ覗き込む。

引き出しは鍵がかかっており、デスクは綺麗。

百科事典などはソリダスターに任せたほうがいい。

絵に近づき、軽く持ち上げる。

するとその小さな隙間から、奥の壁が鉄板になっている部位が見える。

しかしレイモンドの手前、それ以上、触らずに部屋を後にする。

続けて、夫人の寝室に同伴するように頼む。

夫人は主人と同じ2階の寝室であった。書斎の真上にあたる。
大きなダブルベッドがある。

そしてここにも壁に風景画がある。下のに比べるといくらか小さい。

その正面に立ち、いろいろ角度を変えて見る。そして杖を取り出し、念じる。

それでも納得しないように首をかしげるヒエン。

「ねえ、この絵っていつからあるの？」

急に声をかけられ、レイモンドは驚きながらも答える。

「それ、ですか？」

そうですね、奥様が2年ほど前に購入なさった品でございます」

「ふん」

ヒエンはここも軽く持ち上げる。

やはり、裏にはなにやら鉄板が見える。

やっと納得したようにうなずくと、レイモンドと一緒に部屋を後にした。

「ありがとう、もったいよ」

ヒエンはその足で、隣の隣、カレンの部屋へ向かった。隣は夫人の部屋。

彼女は午前中は学校だが、すでに帰ってきているのだろう。声が聞こえる。

ヒエンはほくそえむと、しゃがみこんで、耳を扉につける。

すると、楽しく遊んでいる声が聞こえる。二つ。

幼く高い笑い声と、凜とした女の声。

彼はそのまま、ゆっくり扉を押した。鍵はかかっていない。

細い隙間から中を見ると、背を向ける黒髪の少女。

そして、その奥、ウサギのぬいぐるみが浮いている――！

ヒエンはその細い隙間のまま、杖を持ち出し、静かに念じる。

それから、静かに扉を閉めると、改めて、扉をノックした。

「だれ――！」

幼いカレン嬢が慌てて扉を開ける。

なるほど、面と向かえば何処となく、シャーロット夫人に似ている。

旦那に似なくてよかった、と思うヒエン。10年後が楽しみだ。

「僕はね、幽霊を探してるんだけど。」

ねえ、今、誰かと中で遊んでなかった？」

ヒエンはしゃがんで彼女に問いかける。

「それは、内緒」

そう笑顔で言うと、扉を閉め、鍵まで下ろされた。

ヒエンは鼻で軽く笑う。

「内緒、か」

頭を掻くと、自分のあてがわれた客室へと足を向ける。

ソリダスターが帰ってきたのは夕食直前で、夕食を食べてから客室に戻ってきた。

「なるほど、自分の足でも情報を確認して歩いたんですね？」

「まあね。」

でも、やっぱり幽霊さんに魔法反応がでないんだよな」

うだうだとベットに寝転ぶヒエン。

「で、町での情報は？」

「格段、新しいことは。司祭様が語ってくださったのが、ベースです。」

あとは、ラルフさんは枕元においておいたボウガンで撃ち殺したこと、

十数年に他国で手に入れた大小のエメラルドを売ったことで、会社が大きく成長したことです。」

「エメラルド、宝石か」

「では、私はこれで」

「？」

「図書室にありますので、何かありましたらそちらに」

「あ、そう」

ソリダスターは笑顔で部屋を後にした。

ヒエンもベッドから身体を起こす。

「僕も、見回りぐらいしてくるかな？」

軽く伸びをして部屋を出る。

「とは言ったものの、どこ行きやいいんだ？」

とりあえず、1階中央の大ホールについた。

「2階はデルガド家族、客室、応接間に図書室。

1階に食堂と大小のホールに、書斎と工作室。あと執事達の部屋か」

どこから見て回ろうかと少し考えていると、

ガシャガシャガシャン バリン

「ぎゃー！ー！！！」

何かが割れる音と男の叫び声が聞こえた。

「こつちか」

緋色のローブを翻し、彼は地下へ駆け降りる。

そこは調理室だった。

若い調理人、ジェラルドが部屋の真ん中で腰を抜かしている。

床には食器の破片が散乱している。

それを踏まないように彼に近づき、尋ねた。

「皿やカップが勝手に棚から飛び出して、ふわふわと宙を飛んだんだ。」

それから次々に床に落ちて割れたんだよ。

信じてくれ！嘘じゃねえよ！！」

ヒエンにすがり付いてくる。

続けてコック・マクラウドが駆け込み、彼を抱え、去っていく。

「何事ですか？」

一緒に入ってきた執事のレイモンドがヒエンに訪ねる。

「幽霊さんが、皿を割るだけ割っていったらしい。」

だが、今回ののは大雑把過ぎる」

ヒエンは一人考え始めると、降りてきた階段を登る。

「今迄、姿を見せないように、隠密行動をしていたのに、なぜ、動き出した？」

大ホールへ戻った。

すると、ピアノの音色が聞こえる。

「婦人？」

そう思いながら、大ホールの隣、ダンスホールへ足を向ける。するとそこには白いピアノが置いてある。

が、誰もそこに座っていないのに、鍵盤が沈み、音を放っている。「自動演奏？」

にしては、下手だな」

一瞬、音が止まったが、やはり曲を奏でている。

さらには女のすすり泣きのような音まで聞こえる。

もう一步、ピアノにヒエンが近づくと演奏は止まった。

「お嬢さん、なにをしたいか分からないけど。」

あなたは早く、ここを立ち去るべきだ。僕と一緒に」

相手もなく、ヒエンは二枚目の笑みで呼びかけると、そのまま、背を向けて大ホール、それから客室へと戻っていった。

その背後を、ピアノは曲を奏でる。

ソリダスターは図書室で本を読み続けている。

ちなみに二つの本を同時に、左右の目で別々に読んでいる。

ふと、目を上げると図書室の入り口、開けられた扉から廊下で人形が踊っているのが見えた。

人形はウサギのぬいぐるみ。

ソリダスターの視線に気がつくと、動きを止めて、こちらに一礼。「ごきげんよう」

人形の口が動かずに声が発せられる。女の声だ。

「ウンディーネ、最弱の水を」

ソリダスターは胸に、胸から下げられたシンボルとその横の指輪に手を当てると命令を下す。

すると、指輪から20cm程度の水で構成された女性が飛び出す。彼女が手を振るうと、コップ一杯分の水がぬいぐるみに向かって飛ぶ。

水は確実にウサギをぬらした。

いや、腕の部分は透明のパイプでもあるのか、空中が濡れている。ウサギは慌てて飛び上がり、そのまま移動していく。

ソリダスターも図書室を飛び出す。

そして、床に落ちていた水から追跡した先はカレンの部屋。

鍵のかかっていない中をそっと覗くと、彼女はすやすやと寝ている。

暗闇の中、その枕元、濡れたウサギのぬいぐるみと共に。

「ひゃっ！！！」

深夜、屋敷に悲鳴が響く。

ヒエンは寝ぼけ眼をこすり、そちらに向かう。別に走りはしない。発生元はデルガド夫妻の部屋。

扉を開けると、驚き震えているラルフ氏と、それをなだめる夫人。メイドも一人、駆け込んでいる。

「なにがありました？」

ヒエンが近づき尋ねる。

「眠っていたら誰かに頬を撫でられて、目が覚めたんだ。

そしたら、すぐ目の前に青く透き通った女の顔があった。

あれは、

はっと何かに気がついた彼はそこで口をつぐんでしまった。

「あれは？」

「いや、なんでもない。きっと悪い夢でも見たんだろ。

貴様らがあんなことを言うからだ！下がっていいぞ」

ラルフ氏は邪険に追い払おうとする。

夫人も軽く頭を下げたので、ヒエンは客室に戻る事にした。

翌朝、夫妻と娘、客人二人の朝食。

やはり夫妻の間では会話はなく、ラルフ氏は機嫌悪く、食事をしている。

「失礼します。旦那様、このような物が玄関に」

そういうと、レイモンドは一枚の便箋を彼に手渡した。

それを見たラルフは蒼白になり紙を放り投げると、食堂を飛び出していった。

「旦那様!？」

レイモンドがそれを追う。

「ソリダスター、紙をっ」

「ええ」

ヒエンが慌てて彼を追う。ソリダスターは残り、紙を確認する。

ついた先は一階の書斎。

心配そうなレイモンドをよそに、彼は大きな絵を外し、金庫をあらかわにする。

ヒエンが近づこうとするがレイモンドに部屋の入り口で止められる。

ラルフはそのまま鍵を解き（パズル式）、中を確認する。

ヒエンは横から見てるので、書類が入っていることしか見えない。確認し終わると、安堵のため息をつくラルフ氏。何も失っていないのだろう。

直後、突然目を見開き、鍵を大慌てで閉めると、近くの燭台を持ち上げると大きく振り回し始めた。

「出て行けっ!!!!」

その剣幕にヒエンもレイモンドも下がるしかない。

二人を追い出したあと、扉が閉められる。

「ヒエン様!」

レイモンドの制止も聞かずに、ヒエンは扉に耳を当てた。
ラルフは中で何かを話しているようだ。

人はいなかったから、ヒソヒ草だろう。

任意の場所と、会話をすることが出来る植物。

「伝言を頼む、ラッドに。」

家に来てほしい。15年前の続きだ、と」

ヒエンはレイモンドに扉から引き剥がされた。

「手紙には、なんて？」

客室に戻ると、すでにソリダスターがいた。

「『大事な物は返していただいた』だそうです。

綺麗な文字でしたよ。そして便箋は、そう、確かレイモンドさんの部屋にあるものと同じでしたね」

そんなことまで記憶しているソリダスター！

「そちらは、どうでした？」

「ラルフが、自分で書斎のパズル鍵を開けた。

大事な物は、その中にあるんだろうな。でも、まだ存在していた」

「と、言うことは、鍵の解き方、ばれたってことですかね」

「恐らくな」

ヒエンはベッドに倒れこむ。

「だが、ラルフも動き始めた。なんだか、嫌な感じだ」

それを聞いて、ソリダスターは笑顔になった。

ラルフは今日の出勤をやめ、書斎で仕事をするそうだ。

ヒエンとソリダスターは食休みの後、再び出る事にした。

「今日は、何処へ行きます？」

ソリダスターが尋ねる。

「何処もいかないさ」

「？」

「散歩だよ、散歩。」

町での情報収集は昨日で終わったから。

俺らは出歩かないと、あのオッサンみたいに腐っちまうぜ」

「まあ、かまいませんけど。」

散歩するにしても、今日は天気も悪いですし、それほど動けませんね」

屋敷の裏庭へと足を向けるヒエン、そしてソリダスター。

上空はねずみ色の雲が渦巻き始めた。

裏庭というより、裏山に近いそこを二人は散策している。

「そう言えば、覚えてます？庭師が謎の老婆を見たという証言」

先を歩くヒエンにソリダスターは声をかけた。

「ああ、それが？」

「彼女ですかね？」

ソリダスターが指差したのは、かがみながら、館を盗み見る老婆の後姿。

館からは見えないだろうが、裏に回ればまる見えだ。

ホビット族で、かなりの高齢だ。白髪を綺麗にまとめ、背は大きく曲がっている。

「ビンゴ？」

疑問符ながら、ヒエンが静かにそちらに向かう。

ソリダスターも続く、が

パキリッ

枝を音を立て、踏み割ってしまった。

「おい」

「そんなことより、彼女、逃げますよ？」

確かにソリダスターの指差す先で老婆が逃げる。

「ちえっ」

ヒエンもロープを翻して駆ける。

相手は老婆ですぐに追いついた。正確には、彼女が倒れこんでしまった。

肩で息をしながら震えている。

「ダメですよ、老人に無理な運動をさせては」

ソリダスターはヒエンを戒めるように言うが、無視。
彼女の頭を抱え上げ、ヒエンは尋ねる。

「おい、あの屋敷で起きてる事件について知ってるね？」

「な、なんのことだか」

「そう答えるってことは、知ってるってことですね」

ソリダスターが笑顔を向ける。

ヒエンも分かっているが、わざと言わないのだ。

「ジェニファー、ジェニファー・ランドという女エルフは？」

「さ、さあね」

睨み下すヒエンと目をそむける老婆。

「じゃあ、ラッドって名には？」

「ラッド？」

ソリダスターがヒエンの顔を覗く。

老婆の目が見開いた。ヒエンのロープを握る。

「ラッド、ラッドが来るのかい！」

あんた達、お願いだ。彼女を、彼女を助けておあげ！！」

「彼女って、誰だ」

「彼女は、彼女は」

老婆の首が横に倒れた。

「おい、話の途中だぞ」

ヒエンが揺する中、ソリダスターが彼女の体を触る。

「あまり、食事情がよいわけではないようですね。ボロをまとつてますし。」

高齢に急激な運動、さらにはショック。

ま、気絶しただけですけど。

どうします？お屋敷に連れて行きますか？」

「……いや、確かさつき、炭小屋あったな。」

そこに運ぼう」

老婆をヒエンとソリダスター二人で運び、見張りにはソリダスターのウンディーネをつけた。

「良いんですか？あれで」

ソリダスターが尋ねる。

「実質、何もしてないだろう。知っているだろうけど。」

答えてくれるとは思えんしね。

それより、俺に開けてほしいって言ってた鍵はどこだっけ？」

「おや、憶えていたのですか」

「とう、ぜん」

ソリダスターが前になり、屋敷に戻る。

「ここです、が」

一階の大きな扉の前に立った。その向こうで音がする。

「誰か、おられるようですね？」

扉に手をかけると、難なく開く。ゆつくりとヒエンが中を覗くと、ラルフが工具をいじっているのが見える。

他を見ると何かの工場のように、鉄や木材が散乱している。

ヒエンが指差すとソリダスターも覗き込む。

そして二人そろって、首を離し、その部屋から距離をとる。

「ふむ、作業中ですね」

「何をしていたか、分かるか？」

「ええ、もちろん」

幅1cmから覗いた状態からソリダスターはそれが何かを理解した。

彼は笑顔になった。

「アナザー・ゲートの設定中のようなですね」

「で、その効果は？」

客室に戻り、ヒエンは退屈そうに聞く。

「他次元、この世界でない場所との門ですね。何処とつながってい

るかまではわかりませんが」

「それって、目的を定められて使えるのか？」

「いいえ。そこまでは。」

言うなれば、巨大な地図帳を適当に開いて、指差した場所に移動する、そんな感覚ですね。

まあ、機械をそれに固定できればもう一度いけますが、少しでもいじれば、適当選択に戻ります」

「その、他次元？には、そう、宝石の山やモンスターの」

「当然、そんな世界があっても不思議ではないでしょう」

「ふん」

ヒエンは何かを理解したかのように、ベッドに倒れる。

「降り始めましたね。おや、」

雨が降る窓からウンディーネが入ってきた。

ソリダスターに向かって言葉が発すが、ヒエンには聞こえない。

「あのおばあさん、目が覚めたようです。」

どうします？話を聞きますか？」

「いや、帰ってもらっていいだろ」

ヒエンは手をヒラヒラ振ると、そのまま眠った。

それからしばらくは何も起きなかった。

ヒエンは客室でゴロゴロし、ソリダスターは図書室にこもっていた。

夕刻、雨に濡れた一人の客が現れた。

ハンドアックスを背負う、いかつい顔で頬に傷のある男。

使用人やシャーロットは嫌な顔をしたが、家主であるラルフは彼を喜んで招いた。

そのまま、彼の紹介もないまま、家の人やヒエンたちと一緒に夕食になる。

無言のまま、食事がすすむ。

「あの、ラルフさん」

ヒエンが声を出した。

「あ？」

ほとんど食事を済ませていたラルフが顔を上げる。

「こちら、どちら様でしょう？」

夕方の来客を指し尋ねる。

「貴様らに説明する必要もないだろう。私の古い友人だ。

それより、あと1日だ。ま、手の出しようがないのだろうがな」

ラルフは最後の肉を食べ終わると、立ち上がり扉に向かう。

執事のレイモンドが続こうとするが、

「いや、いらん。二人で話したい」

そう言つと古い友人とだけで食堂を出た。

「最終打ち合わせ、つて所ですかね？」

「だろうな」

見送るソリダスター。

ヒエンはスープをすくいながらシャーロット夫人を見ている。

目線が会つとウィンクを送った。

「それで、最後の一日はどう過ごすのですか？」

「べつに」

客室に戻ると、再びヒエンは寝転がった。

「ラルフから、動き始めるだろう」

「そうですね。ならお任せして、私は図書室にいます。

そうそう、あの客の部屋はこちら側、北の客室ではなく、南側力

レン嬢の隣だそうです」

それだけ言つと、ソリダスターは客室を後にした。

少し経ち、大きな音が立った。

音がしたのは一階、南西の書斎。何かと一応、駆け込んでみる。

ヒエンが廊下につくと、書斎にはラルフが仁王立ちしており、その横に客とレイモンドが立っている。

他の小間使い達も後ろに並んだ。

「何事です？」

ヒエンが尋ねる。

「いや、何。蠟燭スタンドが倒れただけさ」

確かにラルフの横に先で振りまわした大きなスタンドが倒れていた。

「それにしては、大きな」

「うるさい！この部屋は安全なのだ！！」

この部屋の鍵は俺か、レイモンドの部屋にしかないのだ！！」

それだけ怒鳴ると、扉を勢いよく閉めた。

「なにが、したかったんだ？」

ヒエンは首をかしげて図書室に向かう。

「鍵はレイモンドの部屋、ね。なるほど。」

後は皆が寝静まるのを待てば、」

深夜、誰もが寝静まる時間、一人動く影があった。

いや、彼女に影はできない。その体は光を浸透させるのだ。

ただ、月の光だけが彼女の若い肉体をさらす事ができる。

彼女の名前はベラリー、ベラリー・ランド。

母の名はジェニファア・ランド。15年前に殺されたエルフ。

父はラルフ・デルガド。カレンとは異母姉妹にあたる。

15年前、アナザー・ゲートの実験中、異次元に飛ばされたジェニファアはすでに妊娠していた。

その異次元で超大型の爬虫類に追われ、宝石を掴んで逃げ出したのだ。

生まれたときから異次元の影響により、ベラリーは透明であった。異次元での体験で錯乱したジェニファアであったが、出産のショックで正気に戻っていた。

ベラリーの体を治すため、そしてラルフに奪われた宝石を取り返

すためにジェニファアは15年前に忍び込んだが、殺されてしまう。そして今再び、その娘が取り返そうと館に忍び込んでいた。

彼女はレイモンドの部屋に忍び込み、慎重に書斎の鍵を取る。

執事は隣の部屋にいる。音さえ立てなければ透明な身体に気配はない。

その足で書斎に向かう。

あの冒険者たちは当てにならなかった。せつかく真相に近づけてあげようと思ったのに。

鍵を開けると、明かりのない部屋。人影もない。

大きなデスクの隣にかかっている、大きな絵。ここにあるに違いない。

そう思い、絵をずらす。その向こうにはパズル式の金庫が。

これを解けば

つと、足元で音がした。そこはデスクの椅子を入れる場所。そういえば、椅子が大きくずれている。

目を向けると同時に、そこから何か液体が彼女の顔を襲った！

「きゃっ」

彼女は姿は見えないだけで存在し、また触れたものを消すわけではない。

食事だって身体に取り込めば消えるが、未消化のものは胃で見えてしまう。

その体にかけられた墨汁は彼女の位置を示す。

大きな男の腕が彼女を担ぎ上げる。

「そこまでだ、オッサン」

声が聞こえると同時に、ベラリーは床に転がされた。

「レディを扱うには、優しくしなきゃ」

目に入った墨汁をぬぐうと、そこには廊下の明かりを背にした緋色のマントを着る、冒険者がいた。

その右手の上に火の玉がある。それに照らし出される、紫色の髪。

「お前は、」

ベラリーを捕まえていた大きな男は背にしていたハンドアックスを手に持つ。

「名乗り、互いにしてなかったね。お客入。

ヒエンです。よろしく」

「ラッド、だ」

ハンドアックスを縦に振り下ろす。

ヒエンは避けない。右手をかざすだけ。

すると、その中指にある蛇型の指輪が火を噴く！

ラッドが握るのは単なる炭となる。

驚く彼の顔に、ヒエンは左手で握る杖で呪文を1つ。

彼は吹き飛び、気絶した。

「終わりましたか？」

廊下から灯りを持ち、黒髪の僧侶がゆっくり現れる。

「いや、あと一歩だ」

ヒエンは墨汁を垂らす、ベラリーに微笑んだ。

ベラリーがからくり鍵を開けた。

中に入っていたのは鶏の卵ぐらいのエメラルド2個、アナザー・ゲートの設計図、そして裏帳簿であった。

裏帳簿を提出されたラルフはラッドと共に捕まり、シャーロットは無事に離婚をした。

アナザー・ゲートの設計図を得たベラリーはそれを元に、自分で体を治す方法を探すという。

エメラルドは、報酬としてそのままヒエンとソリダスターに渡された。

「分からないことや、逆に分かった事がありましたら、こちらに連絡してください」

ソリダスターはフードを被ったベラリーに連絡先を笑顔で渡した。

「私もアナザー・ゲートについて調べておりますから」

「はい」

手袋をするベラリーが受け取る。

フードを被り、ローブで体を隠す。出ている手足には手袋と靴。声を発せば、普通の女の子と同じなのだ。

「おや、ナンパかい」

一緒にいるヒエンがいやらしい目つきでそれを見る。

「いえ、研究ですよ。」

それよりあなたは、今晚、シャーロット婦人に食事に誘われているでしょう」

「おや、よくご存知で」

「ありがとうございます」

ベラリーとその横に立つ老婆、あの裏庭で見かけたホビットが頭を下げた。

老婆はラルフがつけた、ジェニファアのメイドであつた。

しかし、そのうちに感情が移り、その娘のベラリーの面倒を見続けていたという。

「それでは、お元気で」

「次ぎあうときは、若い肉体を、見せてくれよ」

二人は冒険者たちに手を振り、家へと帰っていった。

「さて、私たちも、戻りますか？」

「そう、だな。夜まではヒマだしね」

冒険者たちも自分の宿へと戻っていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1081p/>

Crystal of moonlight

2010年12月4日22時55分発行